

日本窒素肥料株式会社年表（1896-1944）

大 塩 武

19 世紀の欧米諸国は、肥料として用いるため海鳥の糞や屍であるグアノ（Guano）を輸入していた。しかし、その採掘可能量の減少が杞憂されるに及んで、1870 年頃から、グアノに代えて、チリ硝石が注目されるようになる。このようなとき、1898 年 9 月、英国科学振興協会（British Association for the Advancement of Science）の会長に就任したウィリアム・クルックス William Crookes は、就任演説¹において、チリ硝石の将来的な枯渇を示唆し、空中窒素固定の必要性を唱えている。クルックスのメッセージは、空中窒素の固定に対する社会的な期待を、ヨーロッパにおいて、醸成する契機になった。

社会的な期待に応える形で、ヨーロッパで初めて工業的に成功した空中窒素固定法は、電弧法（Arc Process）であったが、多量の電力を費消するため、その普及はノルウェーなど電力が低廉に得られる地域に限られたのは止む得ないことであった。このような事情の下で、世界的な規模で注目されるようになった空中窒素固定法が石灰窒素法であった。

19 世紀の末に、シアン溶液に溶ける金の性質を利用して、金を回収するシアン化法（青化法 Cyanidation）が完成すると、南アフリカのトランスバル（Transvaal）地方の金山でシアン化カリウムへの需要が強まり、シアン化物を安価に得るための研究が盛んになった。アドルフ・フランク（Adolf Frank, 1834-1916）は、共同研究者であるニコデム・カロー（Nikodem Caro, 1871-1935）と協力して、1895 年に、バリウム・カーバイドに大気から分離した窒素を化合、シアン化カリウム（青酸カリ）を得た。工業的かつ大規模な製造を実現するため、アドルフ・フランクは、シーメンス・ハルスケ会社（Firma Siemes Halske）とパートナーシップを結び、バリウム・カーバイドよりも安価なカルシウム・カーバイドを用いる方法を工夫した。そのとき、アドルフ・フランクの子息アルバート・フランク（Albert Frank, 1872-1965）は、1901 年、カルシウム・カーバイドに空中窒素を化合させたカルシウム・シアンミド（Calcium Cyanamide）を窒素肥料とし

¹ Report of the Sixty-Eighth Meeting of the British Association for the Advancement of Science Hele at Bristol in September 1899.

で使用することを提唱した。なお、カルシウム・シアナミドの製造は、アドルフ・フランクとニコデム・カローによって工業化されたから、フランク・カロー法と称され、カルシウム・シアナミドは、日本では、石灰窒素と呼ばれた²。

日本窒素肥料の創設者である野口遵は、1902年7月に仙台で三居沢カーバイド製造所（株）を設立してカーバイド製造の実績を積んだ上で、4年後の1906年、改めて鹿児島でカーバイドの製造を目的に曾木電気株式会社を設立した。その後、石灰窒素に注目して、1908年4月フランク・カロー式石灰窒素製造法の特許実施権を購入、曾木電気が肥料ビジネスに関与することを明示するため、同年8月、商号を曾木電気から日本窒素肥料に変更した。

石灰窒素は、施肥のタイミングを誤ると残留するカーバイドが植生を害するため、扱いが難しく需要は容易に増加しなかった。しかし、石灰窒素を過熱水蒸気で分解して得られるアンモニアに硫酸を作用させて得られる硫安（変成硫安）は、扱い易かったから、野口遵は、日本窒素肥料の変成硫安製造企業としての自立を目論み、第一次世界大戦中を通じて、日本最大の硫安製造企業に育て上げた。

さて、フランスの化学者・物理学者であるアンリ・ルニョー（Henri Victor Regnault, 1810-1878）は、1840年頃に、窒素と水素からアンモニアを合成する可能性を見出したが、幾多の化学者の試みにも関わらず、アンモニア合成の工業化は実現できなかった。しかし、20世紀に至って研究は急速に進

展、ドイツの化学工業企業 B.A.S.F. は、ポッシュとハーバーのはたらきによって、1911年合成アンモニア日産100吨の工場を完成させた。ハーバー法が誕生するとヴァリアントが叢生したが、カザレー法はそのうちの一つに数えられている³。

1921年に渡欧してカザレー式アンモニア合成法に邂逅した野口遵は、特許実施権を購入、1922年にアンモニア合成工場を延岡に建設、1924年にアンモニアの合成を軌道に乗せて、硫安の製法を変成法から合成法に転換させることができた。

野口遵はアンモニアの合成に必要なとする水素の給源を水の電気分解に求めていたので、野口の空中窒素固定ビジネスは、大規模な電源開発を志向せざるをえなかった。しかし、日本国内の有望な電源は既に押さえられていたから、延岡工場でアンモニアの合成を軌道に乗せると早々に、低廉にして多量の電力の供給が可能となる北朝鮮で電源開発をおこなった。

野口遵は、1925年から鴨緑江の支流である赴戦江の開発に着手し、1926年に朝鮮水電、27年に朝鮮窒素肥料を設立する。1928年から29年にかけて、アンモニア合成工場と硫安工場を建設して、1930年に合成硫安の商業生産を開始する。その後、赴戦江に続いて赴戦江に隣接する長津江の開発に着手して、北朝鮮に空中窒素の固定工場と肥料工場を核とする一大コンビナートを形成する。

世界史的には、19世紀から20世紀にかけての時期に、化学平衡の法則の発見、あるいは高温高圧に耐えられる機械工業技術の発展を背景にし

² 日比勝治『カーバイド工業講話』1931年、丸善株式会社、21頁、26-30頁。著者が26頁以下で依拠している下記のアドルフ・フランクの報告について、筆者も改めて参照した。Adolph Frank, 'Ersatz des Chilisalpeters in der Zukunft. Kalkstickstoff', in: VIII. Internationaler landwirtschaftlicher Congress, Wien, 1907, Bd 2, Sektion II/B, Referat 1. なお、以下の文献も参照した。日比勝治「石灰窒素工業の発達とフランク博士」『日本土壤肥料科学雑誌』22巻3号、1952年3月。73-4頁。日比勝治「『アルバート・フランク』博士を迎えて」『電気化学』第24巻第4号、147頁。1956年4月。

³ 石川一郎『化学肥料』1934年、日本評論社、119-20頁。

て、空中窒素固定工業は、石灰窒素の時代からアンモニア合成の時代へと移行する。野口遵は、まさに同時代的に、日本において空中窒素固定の工業化をビジネスとして確立したのである。

日本窒素肥料は、化学工業特有の多角化を展開したのは事実であるが、実は、「日本窒素肥料の利潤源泉は、多角化が進展して、外形的に、肥料の影が薄くなったように見えても、徹頭徹尾アンモニアを原料とする肥料にあった⁴」という事実を忘れてはならない。このような意味でも、日本窒素肥料における野口遵のビジネスの核心は空中窒素の固定にあったと言ってよい。

筆者は1989年に前掲『日窒コンツェルンの研究』を学界に上梓して、日窒コンツェルンを金融メカニズム（金融体）という観点から分析しているが、野口遵の空中窒素固定ビジネスへの関わりという観点から、その後に改めて野口遵と日本窒素肥料の歴史を考察したのが以下の業績であった。

- 「野口遵の戦略構想」『経済研究』（明治学院大学）126号、2003年。
- 「黎明期カーバイドビジネスの系譜と野口遵——三居沢カーバイド製造所から日本窒素肥料に至る道筋——」『経済研究』（明治学院大学）153号、2017年。
- 「日本窒素肥料における石灰窒素製造工業化の過程——野口遵と藤山常一のはたらき」『経済研究』（明治学院大学）156号、2018年。
- 「日本窒素肥料における変成硫安製造までの道程」『経済研究』（明治学院大学）158号、2019年。
- 「第一次世界大戦後の野口遵——延岡アンモニア合成工場建設までの空白の時間をめぐって——」『経済研究』（明治学院大学）160号、2020年。
- 「赴戦江の開発計画をめぐる森田一雄と日本窒

素肥料の野口遵」『経済研究』（明治学院大学）162号、2021年。

- 「北朝鮮の電源開発をめぐる日本窒素肥料の野口遵と久保田豊——長津江・虚川江・鴨緑江の開発条件をめぐる——」『経済研究』（明治学院大学）164号、2022年。

○「朝鮮窒素肥料株式会社のビジネス——『製品月報』と『製品別原価一覧表』の分析——」『経済研究』（明治学院大学）166・167合併号、2024年。

野口遵のはたらき、あるいは日本窒素肥料活動を歴史俯瞰的に考察しようとしたとき、手にすることができた年表は、社史に付随する、通り一遍の年表に限られていたから、歴史的事実の因果を容易に推測させてくれる年表の必要を痛感した。そこで、上記の業績を準備する作業のかたわら、作業の過程で入手した歴史事実を書き留め、日本窒素肥料と野口遵に関わる年表の作成を試みた。

作成にあたっては、出所を明記した。事実を確認するための方途を明示するためである。仮にチッソ株式会社が所蔵するため容易に立ち戻ることが出来ない資料であっても、出典の明記によってデータの信頼性を確保できると考えた。この年表が、日本窒素肥料あるいは野口遵に止まらず、日本の化学工業史、個別化学工業会社史を究める作業に役立つことを願っている。

この年表は、1896年以来1944年までの48年間、137項目に及ぶが、作成者の日本窒素肥料と野口遵に対する関心が、主として空中窒素の固定にあったから、延岡工場と水俣工場を中心に展開した薬品工業についての情報が相対的には手薄になっていることは否めない。この点の補充は今後の課題としたい。

⁴ 大塩武『日窒コンツェルンの研究』1989年、日本経済評論社、91頁。

日本窒素肥料株式会社年表（1896-1944）

96年	2月 _日	郡山絹糸紡績会社が設立され、沼上瀑布の水利使用を申請。74/372-3頁
	7月 _日	野口遵、帝国大学工科大学電気工学科卒業。13/517頁
98年	6月頃	郡山絹糸紡績会社は沼上発電所建設に着手。75/145頁
	7月 _日	藤山常一、東京帝国大学工科大学電気工学科卒業。13/517頁
	この年頃	服部長七、カーバイド製造試験に着手、橋口源太郎が専ら研究にあたる。7/355頁
99年	4月 _日	郡山絹糸紡績会社は沼上発電所完成。74/372-3頁
00年	春の頃	早川流平、北村十三とカーバイドを研究、多少の成功を収める。7/355頁
	同じ頃	田中國太郎、高等工業学校の学生にカーバイドを研究させる。7/355頁
	この年	野口遵、シーメンス・ハルスケ東京事務所に入社。7/356頁
01年	4月10日	藤山常一が宮城紡績電燈に主任技師として任用される。9/160頁
02年	1月31日	田中新七企画の郡山絹糸紡績会社は余剰電力によるカーバイド製造工業化に成功。8/1018頁
	7月 _日	三居沢カーバイド製造所が設立される。4/32頁
03年	8月 1日	三居沢カーバイド製造所、工場を一時閉鎖（再開10月）。76
	10月19日	曾木発電所予定地の「官有地貸渡願」が提出される。26
	10月19日	曾木発電所予定地の「堰新設公有水面使用願」が提出される。138
04年	1月15日	鹿児島県知事千頭清臣、水路新設許可の命令書を下付。78
	5月～10月	農科大学助教授麻生慶次郎、石灰窒素の施肥試験実施。60/14頁
	10月19日	曾木電気設立発起人（野口遵外5名）、「水路新設願人名義書換願」が提出される。139
	11月17日	曾木電気設立発起人（野口遵外5名）提出の水路新設願人名義書換願が鹿児島県知事より許可される。79
05年	1月 4日	曾木電気株式会社発起人、電気事業経営の許可を申請する。12
	3月 3日	曾木電気株式会社の電気事業経営の申請に許可下りる。12
	10月 _日	鈴鹿保家、石灰窒素をイタリアから輸入。24/17頁 25/17頁
	12月20日	曾木発電所の工事施工認可下りる。2/582頁
06年	1月12日	曾木電気株式会社設立。15
	1月15日	曾木発電所の建設に着手。2/582頁
	2月20日	曾木電気、電気機械をシーメンスシュッケルトから購入する契約を締結。15
	4月30日	三居沢カーバイド製造所閉鎖。77
	5月 _日	日本カーバイド株式会社設立。7/355頁
	9月 8日	曾木電気、大口鉱山鉱業所へ電力供給契約を締結。73
	9月12日	曾木電気、牛尾金山へ電力供給契約締結。73
	10月 6日	曾木電気、電気機械第2回購入契約を東京シーメンスシュッケルトと締結。73
	11月19日	野口遵と藤山常一姫川と大所川の流水を使用する水利権を願ひ出る。27
	この年	野口遵シーメンスシュッケルトを辞する。7/356頁。
07年	1月 7日	野口遵と藤山常一からの姫川と大所川水利使用願が新潟県知事から聴許される。27
	2月 1日	曾木電気の東京シーメンスシュッケルトとの第1回契約に基づく機械神戸到着。18

日本窒素肥料株式会社年表（1896-1944）

	2月17日	曾木電気, 日本カーバイド株式会社と協同事業を起す契約を社長一任とする。80
	3月始め	藤山常一, 野口遵及市川誠次と水俣村に日本カーバイド商會を起す。10/107頁 2/582頁
	3月10日	曾木電気, 日本カーバイド商會が水俣に建設するカーバイド工場へ電力供給契約締結。18
	3月22日	曾木電気, 電気機械第3回購入契約を東京シーメンスシュッケルトと締結。18
	3月_日	水俣工場の建設開始。2/9頁。
	4月10日	曾木電気, 発電所機械据付を島田鹿三に命ず。18
	4月_日	曾木第2発電所用水路工事に着手。2/9頁。
	6月29日	曾木電気, 供給区域拡張許可申請(日本カーバイド商會と水俣村里への電力供給)。2/「年表」
	8月14日	曾木発電所第1期工事(発電機1台800kW)完成する。12
	9月8日	曾木電気, 大口鉱山鉱業所と電力供給契約締結する。12
	9月12日	曾木電気, 牛尾金山株式会社と電力供給契約締結する。12
	10月1日	曾木電気, 大口鉱山へ送電を開始する。12
	11月_日	日本カーバイド株式会社郡山工場売却。8/1025頁
08年	1月31日	曾木電気, 日本カーバイド商會に電力を供給する必要から増資。19
	2月9日	野口遵と藤山常一, 門司を出帆した備後丸で欧州視察の途につく。7/352頁
	2月_日	日本カーバイド株式会社仙台工場売却。8/1026頁
	3月1日	曾木電気, 牛尾金山へ送電開始。12
	3月24日	曾木第2発電所新設認可申請。12
	4月27日	野口遵フランク・カロー式石灰窒素製造法特許実施権購入契約締結。12
	5月30日	野口遵と藤山常一東京に帰着。7/353頁。
	6月26日	曾木発電所と日本カーバイド商會水俣カーバイド工場間の送電線路完成する。12
	7月15日	曾木電気, 日本カーバイド商會合併のため水俣工場実地監査を決定。16
	7月_日	日本カーバイド株式会社越後長岡工場を売却。8/1027頁
	8月_日	水俣カーバイド工場完成。2/9頁。
	8月20日	曾木電気, 水俣工場実地監査により日本カーバイド商會合併有利の報告受ける。17
	8月20日	曾木電気, 日本カーバイド商會合併, 石灰窒素製造明示のため日本窒素肥料に商号変更(登記11/10)。2/「年表」
	10月6日	曾木電気, 50株以上大株主による協議会を開催, 三井との交渉経過を報告, 交渉不調が了承される。72
	10月14日	曾木第2発電所新設工事施工認可。2/「年表」
	10月29日	水俣工場操業開始(カーバイド月産30万ポンド=約13.6トン)。2/「年表」
	11月1日	曾木第2発電所新設工事着工。2/「年表」
	11月10日	日本窒素肥料への商号変更登記される。2/「年表」
09年	1月27日	取締役会長に中橋徳五郎, 専務取締役に野口遵, 常務取締役に藤山常一が就任。2/「年表」
	2月19日	野口遵と藤山常一名義の姫川大所川の水利権を日本窒素肥料に譲渡を稟議決定。27
	2月_日	曾木第2発電所建物完成。12
	5月_日	水俣でフランク・カロー式石灰窒素製造工場建設着手。2/「年表」

	6月25日	稗島硫安工場新設を出願。2/「年表」
	6月_日	水俣カーバイド工場増設工事完成。2/「年表」
	7月17日	曾木第2発電所拡張計画申請（1590kW 3基）。2/「年表」
	8月29日	曾木第2発電所第1期工事完成（出力1590kW 1基，仮使用認可）。2/「年表」
	9月19日	水害により曾木第1発電所発電機大破損。2/「年表」
	10月_1日	曾木第2発電所送電開始。2/「年表」
	11月30日	曾木第1発電所の廃止届提出。2/「年表」
	11月_日	水俣石灰窒素工場完成，試験生産に着手，このとき藤山常一水俣工場長就任。2/「年表」 5/29頁。
	12月_日	稗島硫安工場完成。2/「年表」
10年	1月10日	野口遵と藤山常一，シャナミッド総合商會と交した特許実施権購入契約の権利義務一切を日本窒素肥料に譲渡。61
	1月15日	姫川発電所施工準備のため実地測量実施を決定。29
	6月_日	稗島工場で変成硫安を試験的に製造。2/「年表」
	7月10日	融通資金のため曾木発電所・水俣稗島工場を抵当に勸業銀行から50万円借入稟議決定。28
	7月30日	姫川水系大所川発電水利権使用（姫川発電所）を県に出願。2/19頁
	8月_4日	姫川発電所と青海工場建設のため資本金100万円を倍額に増資することを稟議決裁。63
	8月_日	曾木発電所・水俣工場・稗島工場を以て工場財団を組織し日本勸業銀行から50万円借入。 1/445頁。
	9月10日	姫川発電所と青海工場建設のための増資（100万円を倍額）を臨時株主総会で決定。2/20頁。
	10月_1日	金田榮太郎（06年度東京高等商業学校卒業生）を姫川発電所勤務として採用。88
	10月10日	姫川水系大所川発電水利権使用の許可取得。2/「年表」
	10月21日	曾木第2発電所全発電機（4基）運転開始（6360kW）。2/「年表」
	12月_1日	鹿島組と大所川発電所水路工事請負契約締結。30
11年	1月_日	化合熱利用の連続式石灰窒素製造法（藤山式肥料炉）による製造開始。5/29頁
	4月_日	青海村への電燈電力供給事業の申請を逓信大臣宛おこなう。2/20頁
	6月_1日	野口遵と藤山常一名義の姫川水利権を日本窒素肥料が買い取る。31
	8月18日	「炭化物ヨリ窒素化合物ヲ製造スル方法」（⇒特許第20730号）出願。58
	9月29日	特許第20730号「炭化物ヨリ窒素化合物ヲ製造スル方法」が認められる（8月18日出願）。58
	10月16日	姫川工事の新規注文は当分見合わせを決定。32
	10月_日	化合熱利用の連続式石灰窒素製造法による製造中止。5/29頁
	11月26日	榎並直三郎入社。99/722頁
	11月27日	野口遵水俣工場に到着。57
	11月30日	藤山常一水俣工場を発つ。57
	12月25日	窒素炉と肥料炉の改善を明らかにする12月20日付「肥料試験経過報告」が重役会に提出される。65
	12月25日	神通川水利権獲得の出願を決議する。64

日本窒素肥料株式会社年表（1896-1944）

12年	1月13日	常務取締役藤山常一、重役会を欠席。69
	1月24日	藤山常一「窒素化合物を製造する装置」を特許申請（特許登録4月2日）。81/23頁
	2月13日	姫川発電所・青海工場建設起業費・収支予算書（含工場役割分担変更案）を重役会に提出。70/添付第1号議案
	2月13日	常務取締役藤山常一、重役会欠席。70
	2月13日	常務取締役藤山常一に慰労金2万円支出を3月の臨時株主総会に付議するを決議。70
	2月13日	肥料生産高1日20トン案承認、炉の増設につき会長一任を決定。62
	2月13日	大所川発電所能力を1万キロに倍増し、青梅工場と水俣工場の役割分担変更。62
	2月15日	専務取締役野口遵、臨時工事部長、水俣工場長、大阪工場長、青海工場長兼務を命ぜられる。96
	3月7日	臨時株主総会は2月13日決定の工場役割分担変更案を承認、資本金200万円を倍額に増資。33
	4月1日	肥料生産高1日20トン実現のため、クラッシャー新設と炉の増設案決定す。66
	4月1日	取締役市川誠次、常務取締役に就任。12
	4月1日	重役会、野口をローマに出張させ専売権の交渉にあたらせる旨決議。34
	4月2日	藤山常一が1月24日に出願した「窒素化合物を製造する装置」登録を受ける（特許第21926号）。81/23頁
	4月16日	藤山常一「窒素化合物製造装置」を特許申請（特許登録11月5日）。81/23頁
	5月1日	藤山常一王子製紙苫小牧工場隣接地でカーバイト製造開始。81/25頁 81/「年表」 cf.59/8頁（4月とある）
	5月4日	大阪府西成郡稗島所在硫酸アンモニア工場閉鎖。38
	5月_日	藤山常一の特許第21926号に対し特許無効審判を提起。81/「年表」
	6月1日	曾木発電所及水俣工場を157万6200円で鉄道院に売却を決議。35
	6月1日	藤山常一名義肥料製造新特許権に対し無効及獲得の手続をすることを決議。35
	6月1日	特許第20730号の追加の発明（⇒特許第22678号）を特許申請する。2/17頁
	6月17日	野口遵の2ヶ月の欧州出張を中橋徳五郎会長が決裁。37/321頁
	6月28日	熊本電気は白川水利使用を出願する。40
	6月_日	藤山常一の特許第21926号は日本窒素肥料の18642号20730号の権利範囲とし権利範囲確認審判を起す。81/「年表」 59/8頁
	7月13日	姫川発電所の鉄管製作据付工事5万6398円の予算で着手を決議。36
	7月13日	姫川電線路建設工事15万2017円の予算で着手を決議。36
	7月13日	熊本電気が既に出願中の白川の水利について、熊本電気の先願を承知で、日本窒素肥料は出願を決議。36
	7月13日	石灰窒素製造特許に関する野口遵と藤山常一（市川誠次譲受）が有する権利を18万4000円で買収。36
	7月19日	曾木発電所及水俣工場の鉄道院への譲渡（157万6200円）と借用（14年3月末迄）を契約。2/22頁
	7月22日	姫川発電所、大洪水により被災。2/「年表」

	7月24日	野口遵, シャナミッド総合商会と特許実施協定の追加協定を締結。37/21 頁
	7月 _日	野口遵, エア・リキード社とクロード式窒素分離装置の購入契約締結。2/「年表」
	8月12日	藤山常一, 「電気炉」を特許申請（特許登録 12月28日）。81/23 頁
	8月14日	姫川発電所と青海工場の応急修理費を支出した上で約1ヶ年半工事休止を決議。43
	8月14日	白川の水利使用について先願する熊本電気に出願を取下げさせることを重役会が決議。43
	8月21日	熊本電気, 白川水利使用願を取下げた日本窒素肥料との競願解消を約束する契約を締結。40
	8月31日	野口遵が締結したシャナミッド総合商会との契約を承認。39
	8月31日	カーバイド製造設計料として1万2000円支出を決議。39
	8月31日	水俣工場カーバイド製造炉を5000円の範囲内で改造を決議。39
	8月31日	猪苗代水力電気の電力を利用する工場の設置について, 同社との交渉開始を会長に一任。39
	8月 _日	野口遵が帰国。02/24 頁
	9月 3日	特許第22678号（特許第20730号の追加）。出願は6月1日。2/17 頁
	9月 _日	水俣工場の石灰窒素製造能力を日産20トンに増強。2/「年表」
	10月 3日	日本窒素肥料に対して白川水利使用の許可が下りる。86
	10月10日	白川発電所建設工事を100万円の予算で着手を決議。41
	10月10日	白川発電所の電力を利用する工場の建設を決議。41
	10月10日	工場を八代郡鏡町に設置し鏡工場と命名する。41
	10月10日	アルバート・フランクを技術顧問とし報酬を1年に3000円支給を決議。41
	10月10日	専務取締役野口遵は鏡工場長及び白川発電所長兼務を命ぜられる。97
	11月 3日	熊本電気黒川発電所完成後, その余剰電力購入を契約。12
	11月 5日	藤山常一が4月16日に出願した「窒素化合物製造装置」登録を受ける（特許22981号）。81/23 頁
	11月11日	白川発電所工事費を15万円, 鏡工場工事費を5万円増加を決定。42
	12月28日	藤山常一が8月12日に出願した「電気炉」登録を受ける（特許第23307号）。81/23 頁
	12月 _日	阿蘇郡錦野村で白川発電所建設準備に着手。2/「年表」
	12月 _日	八代郡鏡町で鏡工場の建設に着手。2/「年表」
	12月 _日	鏡工場で変成硫酸を製造する方針を以て諸般の設計がなされた。137
	12月 _日	北海カーバイド工場カーバイドの製造開始。81/ 年表
13年	1月11日	熊本県緑川に適当な水力があれば出願することを決議。83
	1月20日	熊本電気, 白川水系黒川の水利使用許可願を提出（黒川第二発電所）。87/74 頁
	2月20日	鉄道院に譲渡した曾木発電所と水俣工場借用期限（14年3月末日迄）の1年延長を願い出る。88
	3月29日	特許第20730号の追加の発明（⇒特許第24317号）を特許申請する。71/4 頁
	4月 7日	白川発電所の本工事に着手。2/「年表」
	4月10日	渇水期に肥料製造を減少させカーバイドを毎月6~70万磅程度製造販売するを決議。44
	4月10日	揖斐川を調査し有利なときは出願, 出願者あるときは譲受交渉するを決議。44
	4月10日	川内川曾木発電所下流で水利権出願する, 鉄道院同意必要のときは相当条件付すを決議。44

日本窒素肥料株式会社年表（1896-1944）

	4月 _日	野口遵, 『電気評論』4月号に空中窒素固定工業の第1回論文掲載する(11月号まで)。5
	4月 _日	北海カーバイド工場石灰窒素の製造開始。81/「年表」
	5月20日	内大臣川発電所建設工事とそれに伴う鏡工場拡張工事に着手することを決議。45
	6月17日	熊本電気に白川水系黒川の水利使用の許可が与えられる(黒川第二発電所)。86 87/419頁
	6月 _日	鏡工場の建物ほぼ完成。2/「年表」
	7月 6日	鏡工場に硫酸と硫酸アンモニアの製造設備を15万円の予算で設置を決議。46
	7月19日	3月29日出願の特許第24317号(特許20730号の追加)登録。2/17頁。
	8月 2日	藤山常一特許(25557号)出願。58
	8月22日	特許第24317号が特許公報第49号により公にされた。59/11頁
	8月 _日	野口遵は広島電燈の増資新株2万株のうち1万7000株を引き受ける。103/131頁
	9月 5日	藤山常一に対し特許侵害の訴訟提起を決議。47
	9月26日	藤山常一に対し特許(特許第20730号)侵害の告訴を提起。82
	9月 _日	販売用カーバイド年間2000トン生産のため日出工場建設を計画(九州水力電気から買電)。2/26頁
	11月12日	カーバイド工場建設のため大分水力電気との電力購入交渉と契約につき会長一任を決議。48
	12月 9日	青海工場建設工事再開の目処が立たないので電燈事業経営の権利無償譲渡を決議。49
	12月31日	北海カーバイド工場, 窒素含有量18%の石灰窒素を製造。81/「年表」
	12月 _日	鏡工場の諸機械据付完了, 熊本電気からの買電により順次運転開始。2/「年表」
14年	1月12日	日出町にカーバイド工場を新設し, 日出工場と命名を決定。67
	1月12日	水俣工場で石灰窒素製造に従事する職員職工を鏡工場に移転する費用として5000円支出決定。67
	1月 _日	水俣工場製石灰窒素と購入硫酸により, 鏡工場で変成硫酸の商業生産を開始。2/「年表」2/25頁
	2月20日	野口遵『工業上より見たる空中窒素固定法』刊行される。5
	2月 _日	日出工場建設工事着工。2/26頁
	3月 6日	藤山常一の特許(25557号)認められる。58/1頁
	3月21日	鏡工場, カーバイドを製造開始。2/25頁
	3月25日	水俣工場石灰窒素生産休止, 鏡工場に生産を移転。2/「年表」
	3月31日	青海工場完成後の引き渡しを想定してこの日を曾木発電所と水俣工場の鉄道院からの賃借期限日とした。2/22頁, 88
	4月20日	鏡工場でクロード式空気液化分離装置による窒素製造開始。2/25頁
	4月29日	鏡工場で鉛室法設備による硫酸の製造開始。2/「年表」2/25頁
	5月 1日	日本窒素肥料, 藤山常一の特許(25557号)無効審判請求。59/10頁
	5月17日	鏡工場, 石灰窒素の生産開始。2/「年表」2/25-6頁
	6月 _日	野口遵が広島電燈役員に就任。101/7頁。
	7月20日	鏡工場の生産設備増強(硫酸日産30トンを60トン, 変成硫酸25トンを50トン, 石灰窒素50トンを70トン)を決議。50

	10月 _日	北海カーバイド工場, 変成硫安の製造開始。81/26 頁
	11月 22日	白川発電所完成して鏡工場に送電開始(出力 6600kW)。2/「年表」
	12月 10日	鉄道院総裁仙石貢宛に「曾木発電所水俣工場買戻」願書を提出。89
	12月 12日	曾木発電所水俣工場及附属変電所の買戻交渉開始を決議。51
	12月 12日	熊本電気より電力購入につき鏡工場の設備費契約交渉を会長一任を決議。51
	12月 _日	鏡工場変成硫安日産 50 トン体制整う。2/「年表」
15年	1月 12日	水俣新工場の敷地 5 万坪を 3 万円以内で購入, 社宅を 1 万 5 千円以内で建設を決議。52
	1月 12日	日本勧業銀行から 50 万円を本年 3 月に借入を決議。52
	1月 12日	鏡工場変成硫安製造時に生ずる残滓利用のセメント製造設備設置(予算 10 万円)。52
	2月 16日	鉄道院に曾木発電所と水俣工場の払下げを出願, 譲渡価格と同額で払下げを受ける。2/「年表」, 23 頁
	4月 1日	電気化学工業株式会社創立発起人総会。81/35 頁
	4月 19日	鏡工場に肥料炉及付随緒機械増設し窒素工場の全能力まで拡張(予算 7 万円)を決議。53
	4月 19日	曾木発電所電力による水俣新工場のカーバイド製造に必要な施設建造(予算 20 万円)を決議。53
	4月 21日	鏡工場用に九州水力電気から 6000kW の購入の仮契約につき会長に一任を決議。54
	5月 1日	電気化学工業株式会社創立総会。81/35 頁
	6月 19日	本店を大阪市西区土佐堀通 3 丁目 29 番地に移転(登記 7 月 1 日)。2/「年表」
	6月 22日	日出工場完成(カーバイド年産 2000 トン)。2/「年表」
	7月 10日	社債 200 万円募集を 7 月 31 日の定時株主総会に諮るを決議。68
	7月 10日	川内川鶴田発電所と水俣新工場の建設に着手することを決議。68
	7月 24日	特許局, 日本窒素肥料の請求は不適法であると審決。59/11-2 頁
	9月 16日	内大臣川発電所と工場設計変更(2450kW を 3461kW, 予算 55 万円を 72 万 6000 円)して着工決議。55
	9月 24日	日本窒素肥料, 特許局に抗告審判を提起した。59/12 頁
	10月 1日	第 1 回社債 100 万円を募集。2/「年表」
	11月 _日	水俣新工場建設着手。2/「年表」
	11月 _日	鏡工場セメント生産開始(年産 20 万樽, 変成硫安の残滓利用)。2/「年表」
	12月 4日	鏡工場用に九州水力電気から予定した電力を日出工場用に変更を決議。56
	12月 4日	鏡工場でセメント, ロータリーキルン 1 組 10 万円の予算で増設を決議。56
	12月 4日	大川平三郎等申請中の緑川の電力会社から鏡工場用電力購入交渉を会長一任を決議。56
16年	1月 28日	資本金 1000 万円に増資(9 月 18 日増資)。2/「年表」
	2月 4日	セメント販売につき浅野セメントと協約を会長に一任。 84
	4月 _日	水俣梅戸港の工場専用岸壁工事開始。2/「年表」
	7月 7日	100 万円の予算で緑川発電所建設工事に着手することを決議。 85
	11月 _日	水俣新工場のカーバイド炉完成。旧工場操業停止, 炭素電極工場に転換。2/「年表」

日本窒素肥料株式会社年表（1896-1944）

	12月 8日	内大臣川発電所（熊本県上益城郡白糸村）完成，12日に鏡工場へ送電開始（出力 3000kW）。2/「年表」
17年	1月 22日	大嶺無煙炭礦設立。2/「年表」
	4月 _日	広島電燈は太田川及柴木川の水利使用に関する許可を申請。102/43 頁
	8月 24日	姫川発電所と青海工場の全財産を売却。2/「年表」
	10月 25日	川内川発電所（鹿児島県薩摩郡鶴田村）一部完成，水俣新工場へ送電開始（出力 1万 5000kW）。2/「年表」
	この年	広島電燈と広島呉電力の合併談決裂。101/37 頁
18年	3月 8日	緑川発電所（熊本県下益城郡東砥用村）完成，28日に鏡工場へ送電開始（出力 4700kW）。2/「年表」
	6月 _日	水俣新工場完成，変成硫安製造開始。2/「年表」
	8月 16日	鏡工場従業員賃上げを求めスト，従業員要求に沿う知事調停案を双方が受諾。18日から平常勤務。2/33 頁。
	9月 28日	中橋徳五郎，取締役会長を辞任して文部大臣に就任。2/「年表」
	12月 16日	宮崎県議会における県議の発言が「県外送電反対運動」の口火となる。108/174 頁
19年	19年に至り	野口遵は太田川及柴木川の水利使用出願につき広島電燈と日本窒素肥料の共同出願とすることを広島電燈に要請。102/44 頁
	2月 28日	栗野発電所（熊本県始良郡栗野町）完成，水俣工場へ送電開始（出力 1600kW）。2/「年表」
	3月 _日	野口遵は金田榮太郎を広島に派遣する。20/51 頁
	4月 _日	白石宗城，野口遵から広島行きを誘われ家族と移り住む。111/62 頁。
	春の頃	宮崎県選出代議士から，中橋徳五郎を通じて，五ヶ瀬川の水力を利用する工場の誘致がある。2/47 頁。
	7月 1日	鏡と水俣に工場付属病院開設。2/「年表」
	7月 7日	豊川良平，取締役会長に就任。2/「年表」
	9月 26日	日本窒素肥料に太田川の水利使用の許可が下りる。106
	9月 26日	中国電力の株式の半数を日本窒素肥料が引き受けることを決議する。104
	9月 _日	太田川及柴木川の共同水利使用許可が下りたので，野口遵は中国電力設立を決する。102/44 頁
	9月 _日	野口遵は広島に移住。20/51 頁
	10月 14日	太田川及柴木川水電工事に關する広島電燈と中国電力の契約成立。102/44 頁
	10月 31日	広島電燈の株主総会は広島電燈株式 6 株に中国電力株式 1 株割当を決議。102/44 頁
	11月 1日	中国電力株式会社設立。104
20年	1月 10日	この春にパリで開催の「ローマ特許実施各会社ノ連合會議」に代表者派遣を決する。94
	2月 29日	広島市長，野口遵から広島市庁舎建築費として 10 万円の寄付を受けた旨発表。100/1920 年 3 月 2 日
	2月 16日	五ヶ瀬川の水利権に基づく資本金 500 万円の株式会社設立を決定。109
	3月 3日	工藤宏規の入社を稟議決裁。95/143 頁
	3月 30日	資本金を 2200 万円に増資。2/「年表」
	5月 _日	五ヶ瀬川電力（資本金 500 万円）を設立して，株式の大部分を引き受けた。2/47 頁

	6月12日	取締役会長豊川良平死去。2/「年表」
	10月 _日	野口遵は広島電燈の取締役を辞任。101/37 頁
	12月 6日	「野口専務取締役外技師二名ヲ欧米ニ派遣シ旅費金四万円以内を支出スルコト」。90
	12月末	逓信大臣野田卯太郎は五ヶ瀬川の水利権を設立が予定される九州送電に許可する旨提案。108/176 頁
21年	1月10日	野口遵、楠寛之助と谷口喬一を引き連れて渡欧（～5月）。98/51 頁
	1月 _日	九州送電創立発起委員会開催。108/176 頁
	3月25日	カザレー式アンモニア合成法導入の仮契約を締結。2/「年表」
	3月 4日	広島電燈と広島呉電力は合併契約を締結。101/39 頁
	5月22日	宮崎県県外送電反対同盟が成立、全県的な反対運動展開の契機となる。108/177 頁
	5月 _日	野口遵、欧米視察から帰国。98/56 頁
	6月18日	「野口遵氏カ伊太利ニ於テ締結セシ人造絹糸ニ関スル契約ハ日本窒素肥料ニ於テ継承セサルコト」。91
	6月18日	野口遵がイタリアで個人名義で締結したカザレー式合成アンモニア法の特許契約一切を日本窒素肥料が継承する。91
	8月12日	広島電気の設立総会。101/44 頁
	9月 _日	野口遵再び渡欧する。98/56 頁
	11月25日	野口遵、グランツシュトフ社からビスコース人絹の特許を個人名義で取得。2/「年表」
	11月30日	日出工場を九州水力電気に譲渡。2/「年表」
	12月12日	カザレー法アンモニア合成法特許実施権購入の本契約を締結。2/「年表」
22年	2月28日	「カザレー式特許ニ依ル第一工場ハ鏡又ハ水俣工場内へ設置スルコト」を決議。92
	2月28日	200万円を明治生命と東京海上から借入れること、借入交渉を各務幸一郎・桐島像一両氏に依頼することを決議。92
	2月28日	Dr.Frank 氏へ顧問料として毎月 250 円を当分の間支払うことを決議。92
	3月10日	鏡にアンモニア合成工場を建設する計画に基づき、この 10 日起工式挙行を予定するも地元の反対で中止。02/47 頁
	3月21日	旭絹織の発起人会。108/29 頁
	3月26日	2月28日の借入決議は、50万円を日本生命、150万円は東京海上と明治生命を借入先として取締役桐島像一・監査役各務幸一郎両氏に借入交渉の依頼を決議。93
	3月26日	カザレー式新工場を鏡工場内に設置する計画を 180 万円で宮崎県延岡に建設することに変更。93
	4月 2日	野口遵、鏡工場幹部三名と延岡に赴き恒富村と正式な交渉をおこなう。110/22 頁
	4月 _日	広島電気の守屋義之、中国電力社長野口遵に、中国電力を広島電気に合併することを提議。101/123 頁
	5月25日	野口遵、喜多又蔵と共同で旭絹織を設立、創立総会。108/29 頁
	7月 _日	五ヶ瀬川発電所建設に着手。2/「年表」
	8月 3日	延岡工場起工式。2/「年表」
	夏	野口遵は伯林で堀友近に人絹製造開始を告げる。99/743 頁

日本窒素肥料株式会社年表（1896-1944）

	11月20日	旭絹織は膳所工場の増改築工事に着手。108/32頁
	12月5日	五ヶ瀬川電力に派遣する重役として野口遵・荻生伝・島田鹿三・大島英吉を選出。105
	12月5日	出雲電気に派遣する重役として野口遵・市川誠次・金田榮太郎を選出。105
	12月	旭絹織常務取締役上嶋五一郎、グランツシュツフ社の製造法視察と注文済機械発送のため出張（23年5月迄）。108/32頁
23年	1月20日	本店を大阪市北区玉江町2丁目4番地1に移転。2/「年表」
	2月28日	五ヶ瀬川水利使用目的の阿蘇水力電気（資本金150万円）設立、馬見原発電所建設着手。2/「年表」、107
	3月4日	カザレー社と機械製作会社から機械据付監督技術者3名が来延。110/81頁
	8月30日	三菱合資会社は長津江の開発を申請する。133/6181-2頁
	10月5日	延岡工場でアンモニア合成運転開始。110/83頁
	10月25日	延岡工場で硫酸製造開始。110/278頁
	10月_日	野口遵、延岡工場の第2期増設を決定。110/88頁
	11月9日	カザレー式アンモニア合成の工業的成功を確信させる成果が出る。カザレーは翌日帰国。110/87頁
	11月19日	延岡工場第2期増設のため第1期と同型のアンモニア合成装置をカザレー社に発注。110/88頁
	11月19日	カザレー社からの派遣技術者4名帰国。110/87頁
	12月27日	延岡工場で触媒還元からアンモニア生成までの操作基準作られる。110/87頁
	12月_日	延岡工場で全面的に製造開始、製造能力倍加のため第2期増設工事着手。110/278頁
	12月_日	旭絹織にグランツシュツフ社から主任技師メーナーが来日。108/33頁
	年末	白石宗城は野口遵の特命により、電気化学コンビナート建設のため屋久島・只見川・黒部川・糸魚川等の検討を進める。111/76頁
24年	4月_日	延岡工場アンモニア生産軌道に乗る。2/「年表」 110/88頁
	5月25日	旭絹織の膳所工場操業開始。108/33頁
	春	久保田豊は小橋一太の選挙で一緒になった同郷の岩永米吉から朝鮮で水利工事ビジネス展開を誘われる。116/8頁
	5月_日	久保田豊は岩永米吉と朝鮮に渡り久保田工業事務所京城出張所開設、朝鮮全土地図を買い込んで6月に帰国。112/100-1, 116頁
	6月1日	旭絹織膳所工場ですべてレーヨン糸が紡糸された。108/33頁
	6月_日	久保田豊は陸軍省陸地測量部の朝鮮全土にわたる5万分の1地図を購入。112/116頁
	8月末	旭絹織はレーヨン糸の販売開始。108/33頁
	8月_日	森田一雄は久保田豊を丸の内の事務所を訪ね朝鮮地図を借り受ける。112/104頁
	9月_日	森田一雄は久保田豊に赴戦江と長津江の可能性を伝え二人で机上の計画を作成。112/105-8頁
	10月_日	森田一雄は現地視察のため朝鮮に渡る。112/109頁
	10月22日	朝鮮水電会社発起人副島道正及森田一雄外6名は「発電水利使用許可願」を同日付咸鏡南道知事宛提出。120
	秋	両毛の織機のほとんどが人絹糸を使用、人絹糸用の大革命が起こる。115/23頁

	12月17日	日本窒素肥料，朝鮮水電発起人総代宛に工事落成すれば電力供給を受ける旨約束する電力需給予約書交付。119
	12月21日	朝鮮水電発起人総代名義で発電水利使用願書一部訂正願提出（日本窒素，野口遵等7名の発起人追加その他）。119
	12月 _日	森田一雄の案内で野口遵，金田榮太郎，白石宗城，重松重治は漢岱里まで実地踏査。111/77頁，122/73頁
	12月 _日	延岡工場第3期増設工事着手。110/278頁
	年末	旭絹織膳所工場フル操業開始。108/34頁
25年	1月 _日	延岡工場第2期増設工事完成（アンモニア日産15トン）。2/「年表」
	1月 _日	延岡工場第3期増設（1，2期合計に匹敵）を決定，カザレー社にアンモニア合成装置一式を発注。110/88頁
	1月 _日	旭絹織は90デニールの細糸を国内メーカーとして初めて出荷，好評を博す。108/34頁
	2月18日	野口遵は土木部長平野浅吉から同日付報告書「長津江虚川江視察報告ノ件」を受ける。122/73頁
	3月1日	工業試験所への併合に伴い農商務省臨時窒素研究所で合成硝酸を研究していた村山力蔵が入社。2/53頁 110/342頁
	3月 _日	日本窒素肥料の役員会は，朝鮮の工事完成までの金融及び収支予想を検討。122/73頁
	4月6日	日本窒素肥料重役会は赴戦江水利使用につき10万円の範囲内で測量・調査等の支出を決議する。122/74頁
	5月26日	朝鮮水電株式会社設立発起人の引受株数（60万株中日本窒素肥料54万株等々）を総督斉藤実に届け出る。127/72-3頁
	6月26日	赴戦江の発電水利使用不許可が三菱合資会社に下りる。132/762頁
	6月26日	赴戦江の発電水利使用の許可が日本窒素肥料に下りる。122/75頁
	6月26日	赴戦江における電気事業経営の許可が下りる。122/74頁
	7月 _日	森田一雄は実施設計に着手。122/75頁
	7月 _日	水俣でカザレー式アンモニア合成工場建設に着手。2/「年表」
	8月8日	五ヶ瀬川発電所試運転，翌日9日より延岡工場に送電開始。110/21頁
	9月16日	杉本敏夫は遠心式紡糸法調査のため野口遵に命ぜられ渡欧（26年4月2日帰国）。115/26頁
	9月10日	球磨川水系川辺川支流三河川の発電水利使用の許可取得，頭地・竹ノ川発電所の建設に着手。2/「年表」
	10月26日	本店を大阪市北区宗是町1番地（大阪ビルヂング）に移転（11月9日登記）。2/「年表」
	年の終わり頃	延岡工場で山田豊が酢酸合成の実験開始。113/32頁
26年	1月27日	朝鮮水電株式会社設立。2/「年表」
	1月 _日	延岡工場第3期増設設備据付開始。110/89頁
	2月 _日	馬見原発電所（熊本県阿蘇郡馬見原町）完成，延岡工場へ送電開始（出力4500kW）。2/「年表」
	3月27日	旭絹織は新工場建設のため岡富村に約12万坪の用地購入契約締結。108/40頁
	4月10日	間組は松興（赴戦江第1発電所所在地）派出所設置。123
	4月 _日	赴戦江開発に必要なインフラと発電所建設にかかわる準備工事開始。2/64頁

日本窒素肥料株式会社年表（1896-1944）

	7月 1日	赴戦江の本工事開始（間組は派出所を出張所に昇格）。124/42 頁
	9月 4日	日本窒素肥料，五ヶ瀬川発電所を買収，五ヶ瀬川電力は9月25日に解散。2/「年表」
	9月16日	信濃電気と合弁で信越窒素肥料を設立。2/「年表」
	9月21日	三菱合資会社（朝鮮鴨緑江水力発電）は，長津江開発の許可を受ける。134/7214-7「年表」
	9月 _日	鏡工場の操業停止，肥料製造設備を信越窒素肥料直江津工場に移設。2/「年表」
	9月 _日	赴戦江大堰堤築造の準備工事に着手。2/「年表」
	10月 _日	朝鮮鉄道新興線咸興駅から松興まで運転開始。124/38 頁
	11月 6日	川走川第2発電所（熊本県阿蘇郡柏村）は延岡工場へ送電開始（出力3000kW）。2/「年表」
	11月 _日	松興駅から白岩山を越え赴戦嶺に至る鋼索鉄道（インクライン），赴戦嶺駅から湖岸駅までの鉄道線，それぞれ完成。124/38 頁
	12月25日	工場敷地買収のため永里高雄・内田安弥太と興南に赴いた白石宗城は，この日湖南里地区について話をまとめた。111/79 頁
	12月25日	水俣アンモニア合成工場試運転開始（硫安年産6万トン）。2/「年表」
	12月 _日	水俣納式硫酸工場稼働開始。2/「年表」
27年	1月 8日	白石宗城，工場敷地購入代金支払のため延岡出発咸興に向かう（永里高雄と内田安弥太は10日に出発）。125/216 頁
	3月 7日	阿蘇水力電気馬見原発電所を買収。2/「年表」
	3月11日	川走川第一発電所（熊本県阿蘇郡柏村）の使用認可取得，延岡工場へ送電開始（出力1700kW）。2/「年表」
	3月末～4月	工藤宏規と坂口徳蔵等工場設計スタッフ30名新築の社宅に到着。111/79, 80 頁
	4月 _日	水俣工場，合成硫安製造開始，変成硫安製造中止。2/「年表」
	5月 2日	朝鮮窒素肥料設立。2/「年表」
	5月 _日	延岡工場第3期増設工事完成。110/279 頁
	6月15日	朝鮮窒素肥料，西湖津（興南）工場起工式。興南工場第1期建設工事開始。2/「年表」
	6月25日	日本窒素肥料，資本金4500万円に増資（1月22日登記）。2/「年表」
	6月 _日	朝鮮窒素肥料，アンモニア合成工場・硫安工場の建設に着手。2/「年表」
	7月18日	一ツ瀬川発電所（宮崎県児湯郡三納村）の仮使用許可取得，延岡工場へ送電開始（出力1万kW）。2/「年表」
	7月 _日	赴戦江開発に必要なインフラと発電所建設にかかわる準備工事が完了，赴戦江大堰堤構築の本工事に着手。2/64 頁
	9月28日	竹ノ川発電所（球磨郡五木村）の仮使用許可取得，水俣工場へ送電開始（出力2700kW）。2/「年表」
	9月30日	鏡工場閉鎖。2/「年表」
	10月3日	鏡工場敷地建物を大日本人造肥料に売却。2/「年表」
	10月 _日	信越窒素肥料直江津工場完成，カーバイド製造開始の後，11月に石灰窒素製造開始。2/「年表」
28年	1月 1日	朝鮮窒素肥料，西津湖工場を興南工場に改称。2/「年表」
	3月 2日	朝鮮窒素肥料，硫安製造営業の免許を取得。2/「年表」
	3月 _日	旭絹織の上畠五一郎，グランツシュトフ社と交渉のため出張（11月迄）。108/43 頁

	春終り頃	水俣酢酸工場試運転開始。113/38 頁
	5月 9日	頭地発電所(球磨郡五木村)完成, 水俣工場へ送電開始(出力 5000kW)。2/「年表」
	5月 22日	クロード式窒素工業より合成アンモニア製造禁止と損害賠償の提訴を受ける(勝訴 35年 10月)。2/「年表」
	6月 _日	延岡硝酸工場完成, 希硝酸の製造を開始(日産 24 トン)。2/「年表」
	7月 _日	北朝鮮を台風が襲う。城川江の洪水で専用鉄道の被害甚大, 全体工事 1年遅延の因となる。112/139-40
	8月 _日	朝鮮窒素肥料は, 咸鏡北道に石炭 38 鉱区を朝鮮銀行から譲渡される。後の永安工場。1/「年表」
	11月 6日	野口遵は渡米してベンベルグ社と銅アンモニア法人絹製造技術導入契約を締結, 上嶋五一郎と帰国。2/「年表」 108/44 頁
	12月 _日	朝鮮窒素肥料, 興南工場第 2 期建設工事開始。2/「年表」
29年	年開け早々	酢酸合成を担う山田豊, 北村忠義とベンベルグ絹糸製造技術習得のためドイツ出張を命ぜられる。113/41 頁
	2月 _日	延岡硝酸工場, 濃硝酸製造開始(日産 7 トン)。2/「年表」
	4月 9日	日本棉花所有旭絹織全株式の買収を決定。2/「年表」
	4月 15日	ベンベルグ社と日本ベンベルグ絹糸を設立。2/「年表」
	4月 18日	旭絹織の臨時株主総会で野口遵の社長就任をはじめとする新役員決定。108/44 頁
	8月 _日	赴戦江第 2 期工事(第 2 第 3 発電所)着工。2/66 頁
	夏頃	水俣工場勤務の北村忠義と山田豊をドイツベンベルグ社に技術習得のため派遣。115/42
	10月 _日	朝鮮窒素肥料, 興南工場第 1 期建設工事ほぼ完成に伴い, 試運転開始。2/「年表」
	11月 _日	赴戦江第 1 期工事(第 1 発電所)完成, 興南工場へ送電開始。2/「年表」
	11月中旬	野口希望の無燃 60 デニール日産 3 トン能力工場の平面図と姿図がベンベルグ社から届く。115/43 頁
	12月 21日 or 22日	杉本敏夫, 延岡ベンベルグ工場設計に就き興南工場で支援を受けるように野口遵から指示され, 翌日出発。115/43-4 頁
	12月 28日	朝鮮窒素肥料, 「硫磷安」製造営業の許可取得。2/「年表」
	12月 29日	野口遵, ベンベルグ工場建設予定地を岡富村から恒富村への変更を伝え, 三町村合併を懇請, 地元は受ける。115/46-8 頁
30年	1月 2日	朝鮮窒素肥料, 硫安生産開始。2/「年表」
	1月 15日	朝鮮窒素肥料, 朝鮮水電を合併。2/「年表」
	1月 25日	水俣工場, 梅戸火力発電所の使用許可取得して運転開始(出力 1万 4000kW)。2/「年表」
	1月 31日	朝鮮水電, 鉄道部門を分社化して新興鉄道を設立。2/「年表」
	2月 1日	日本ベンベルグ絹糸, 延岡ベンベルグ工場の建設に着手。2/「年表」
	3月 4日	朝鮮窒素肥料, 硫磷安工場完成(日産 70 トン)。2/「年表」
	4月 1日	延岡町, 恒富村, 岡富村の三町村合併。110/279 頁
	4月 _日	朝鮮窒素肥料, 興南工場第 3 期建設工事開始。2/「年表」
	6月 _日	水俣工場, 合成酢酸の製造に成功(中間試験設備), 無水酢酸とアセトンの製造実験に着手。2/「年表」

日本窒素肥料株式会社年表（1896-1944）

	10月 _日	赴戦江第2発電所が完成。2/66頁
	10月 _日	水俣工場はセメントの製造販売を中止。2/「年表」
	11月 1日	興南工場、硫燐安生産開始。2/「年表」
	11月 _日	興南工場、硫安第2期工事完成。2/「年表」
	11月 _日	赴戦江第3発電所竣工して、赴戦江第2期工事完成。2/「年表」 2/66頁
	12月 4日	日本窒素火薬設立。2/「年表」
	12月 15日	興南工場、第2期工事完成、硫燐安の販売を開始。2/「年表」
	12月 _日	工藤宏規、興南肥料工場で石炭液化の実験を開始。135/89頁。
	翌年にかけて	朝鮮窒素肥料、翌年にかけて希有の冬季湯水に悩む。2/「年表」
31年	1月 30日	日本窒素火薬延岡火薬工場起工式。2/「年表」
	4月 18日	日本ベンベルグ絹糸、延岡ベンベルグ工場第1期工事の大部分が完成して運転開始。2/「年表」 110/39
	4月 30日	森田一雄は朝鮮窒素肥料専務取締役を辞する。122/76頁
	4月 _日	延岡工場、硝安生産開始。2/「年表」
	5月 1日	朝鮮窒素肥料、硫燐安工場増強（日産250トン）。2/「年表」
	5月 21日	日本ベンベルグ絹糸と統合するため、延岡薬品工場を日本窒素肥料から分離、延岡アンモニア絹糸設立。2/「年表」 110/39頁
	5月 _日	石炭直接液化の先鞭として永安でルギ式低温乾溜工場建設決定、工藤宏規は永安に転出。135/88頁
	6月 25日	日本窒素肥料、資本金4500万円から9000万円に増資（11月25日登記）。2/「年表」
	7月 1日	日本ベンベルグ絹糸、ベンベルグ糸の販売開始。2/「年表」
	7月 11日	朝鮮窒素肥料、永安工場（石炭低温乾溜工場）建設に着手。2/「年表」
	8月 20日	朝鮮窒素肥料、資本金を6000万円に増資。2/「年表」
	8月 _日	水俣旧セメント工場を用いた合成酢酸工場（日産3.5トン）第1期工事開始。2/55頁
	10月 _日	朝鮮窒素肥料、興南油脂工場の建設に着手。2/102頁
	11月 26日	第1回技術会議を興南工場で開催（日窒グループ全社技術会議、興南・水俣・延岡工場持ち回り）。2/「年表」
	11月 _日	興南工場第3期肥料関係工事完成（年産硫安40万トン、硫燐安5万トンの生産体制完成）。2/「年表」
	12月 1日	五ヶ瀬川発電所・一ツ瀬川発電所などの発電所と送配電線路を延岡アンモニア絹糸に譲渡。2/「年表」
32年	2月 _日	朝鮮総督府、朝鮮電気事業令を公布。129/597頁
	2月 5日	三菱合資、長津江の開発着手延期。不許可の場合水利権放棄を決定。132/763頁
	3月 20日	興南油脂工場、硬化油生産開始（日産110トン）。2/「年表」
	3月 _日	湯水に対処するため赴戦江第4発電所着工。2/66頁
	5月 _日	水俣合成酢酸工場の第1期工事完成して製造開始。114/79頁 117/45頁
	5月 _日	永安工場、ルギ式石炭低温乾溜炉完成（石炭処理能力年産10万トン）。2/「年表」
	6月 8日	日本窒素火薬、延岡火薬工場完成。2/「年表」

	6月16日	日本窒素火薬，延岡工場でダイナマイトの製造開始。2/「年表」
	6月27日	興南油脂工場，グリセリン第1期工事完成（日産2万トン）。2/「年表」
	6月_日	永安工場，永安火力発電所完成（出力6000kW）。2/「年表」
	7月_日	興南油脂工場，グリセリン生産開始。2/「年表」
	7月_日	水俣合成酢酸工場，第1期工事完成。2/55頁
	8月_日	日本窒素火薬，延岡火薬工場で硝安爆薬の製造開始。2/「年表」
	8月_日	興南油脂工場，脂肪酸製品の生産開始。2/「年表」
	9月_日	間組は赴戦湖下流に二つの貯水池建設のための土堰堤工事を受注。128/388頁
	10月_日	旭絹織，延岡レーヨン工場第1期工事開始。2/「年表」
	10月_日	水俣合成酢酸工場第2期工事着手。2/55
	10月下旬	久保田豊は野口遵を自動車で長津江の水利地点に誘い現地視察。112/168頁
	11月26日	第1回技術会議を興南工場で開催（日窒グループ全社技術会議，興南・水俣・延岡工場持ち回り）。2/「年表」
	11月_日	水俣合成硝酸工場建設開始。2/54頁
	12月30日	興南火力発電所，送電開始（出力1200kW）。2/「年表」
	12月30日	赴戦江第4発電所完成，送電開始。2/「年表」
	12月_日	三菱合資，長津江の開発着手の延期願を取り下げる（水利権放棄を決定）。132/762頁
	12月_日	永安パラフィン工場完成して運転開始。2/「年表」
	12月_日	水俣工場，石灰窒素の製造中止。2/「年表」
33年	1月20日	長津江の水利使用および電気事業経営の許可を申請。2/「年表」
	2月18日	三菱の長津江電力が長津江水電に水力電気事業関係土地並調査資料其の他一切を譲渡する契約締結。132/762頁
	4月21日	長津江の電気事業経営の許可を取得。2/「年表」
	4月27日	水俣合成酢酸工場，第2期工事完成。114/79頁
	5月1日	水俣合成硝酸工場完成。2/「年表」
	5月11日	長津江水電設立。2/「年表」
	6月5日	水俣濃硝酸工場完成。2/「年表」
	7月15日	延岡アンモニア絹糸，日本ベンベルグ絹糸と旭絹織を吸収合併，旭ベンベルグ絹糸に改称。2/「年表」
	8月下旬	長津江水電，水圧隧道杭打ち工事開始。1/484頁
	9月_日	長津江第1発電所の基礎工事開始。2/「年表」
	9月_日	永安工場，メタノール生産開始（月産140トン）2/「年表」
	10月_日	阿吾地火力発電所完成（出力5000kW）。2/「年表」
	10月_日	長津江水電，長津江堰堤基礎工事開始。2/「年表」
	11月_日	朝鮮電気事業令施行（府令第116号）。129/597頁
	12月21日	旭ベンベルグ絹糸，延岡レーヨン工場第1期工事完成。2/「年表」
	12月26日	日本窒素肥料，会長制を廃止して社長・副社長制採用。野口は取締役社長に就任。2/「年表」

日本窒素肥料株式会社年表（1896-1944）

	12月 _日	永安工場，ホルマリンの製造工場完成。135/90 頁
34年	1月 _日	永安工場，ホルマリン生産開始。2/「年表」
	2月20日	興銀を受託会社とし朝鮮窒素肥料工場財団を担保に6000万円の物上担保付社債発行決定。2/「年表」
	4月30日	長津江水電，平壤送電の電気事業経営の許可を取得。2/「年表」
	4月 _日	旭ベンベルグ絹糸，延岡ベンベルグ工場第2期工事完成。2/「年表」
	5月16日	朝鮮送電設立。2/「年表」
	5月20日	興南過燐酸石灰肥料工場完成。2/「年表」
	5月上旬	長津江第1期工事として葛田に貯水池堰堤を築造する本工事着手。1/484 頁。
	6月13日	アメリカン・マグネシウム・コーポレーションとの合併で日本マグネシウム金属設立。2/「年表」
	6月15日	水俣無水酢酸工場完成して生産開始。2/「年表」
	7月 _日	水俣合成酢酸工場，第3期工事完成。114/79 頁
	8月31日	興南脂肪酸工場完成。2/「年表」
	11月29日	水俣酢酸繊維素実験工場完成。乾式紡糸に成功，アセテート原料として使用可能を確認。118/46 頁 2/「年表」
	12月 _日	赴戦湖下流の二つの貯水池建設工事完成。128/388 頁
	暮	久保田豊，咯血して倒れる。別府で二ヶ月ほど療養。112/179 頁。
35年	1月 _日	朝鮮送電は平壤送電線と平壤変電所の建設に着手。2/93 頁
	2月15日	朝鮮窒素肥料は第1回社債発行（1500万円，長銀引受，2月27日登記）。2/「年表」
	3月18日	朝鮮窒素肥料の石炭化学・人造石油部門を分社化して朝鮮石炭工業を設立。2/「年表」
	3月29日	水俣工場，酢酸カルシウム分解法によりアセトン（アセテート紡糸用溶剤）の試験生産を開始。2/「年表」
	3月 _日	永安工場，合成樹脂「チソソライト」生産開始。2/「年表」
	3月 _日	朝鮮窒素肥料，石鹼の製造販売開始。2/「年表」
	3月 _日	旭ベンベルグ絹糸，延岡ソーダ工場第2期工事完成。2/「年表」
	4月1日	朝鮮窒素肥料，永安工場及び永安・吉州・阿吾地の各炭鉱を朝鮮石炭工業に譲渡。2/「年表」
	4月4日	大豆化学工業設立。2/「年表」
	4月24日	朝鮮窒素火薬設立。2/「年表」
	5月 _日	酢酸繊維素（アセテートフレックス）に商標ミナリットを冠し，航空機塗料会社，電線業者等に販売開始。2/「年表」 117/45 頁
	7月8日	長津江水電，水圧隧道貫通。1/484 頁
	7月 _日	旭ベンベルグ絹糸，延岡レーヨン工場第2期工事完成。2/「年表」
	7月 _日	水俣濃硝酸増設工事完成。2/「年表」
	9月4日	旭ベンベルグ絹糸延岡調味料工場，グルタミン酸ソーダ生産開始。2/「年表」
	10月21日	朝鮮窒素肥料，第2回物上担保付社債総額2500万円募集。2/「年表」
	10月28日	日本窒素火薬延岡プラスチック工場，チソソロイドの生産開始。2/「年表」

	10月 _日	長津江第1発電所の4基中1基(3万6000kW)が完成, 送電開始。2/「年表」
	11月25日	朝鮮送電, 長津江・平壤間200km・11万Vの送電線完成, 送電開始。2/93, 「年表」
36年	1月23日	長津江第1期工事完了。長津江第1発電所の未稼働発電機3基運転開始(出力10万8000kW)。2/「年表」
	1月 _日	本宮工場, 水銀法苛性ソーダ生産開始。2/「年表」
	2月11日	朝鮮窒素火薬, 龍城工場で導火線生産開始。2/「年表」
	3月26日	長津江水電, 虚川江と南大川の水利権を取得。2/「年表」
	3月 _日	興南カーボン工場, 一部運転開始。2/「年表」
	3月頃	久保田豊, 二・二六事件を病床で聞いた頃から急速に回復, 3月頃には現場に立つ。112/180頁
	5月 _日	工藤宏規はソ連国境に近い阿吾地で石炭の直接液化工場の建設に着手した。135/91頁
	5月 _日	興南油脂工場, 食用油脂, 人造バター生産開始。2/「年表」
	5月 _日	水俣合成酢酸工場, 第4期工事完成。114/79頁。
	6月 1日	朝鮮窒素肥料, 大豆化学工業を合併し, 資本金1000万円増加(資本金7000万円)。2/「年表」
	6月 1日	朝鮮石炭工業, 灰岩工場(後の阿吾地工場)の建設に着手。2/「年表」
	6月27日	朝鮮窒素火薬, 興南硝酸工場完成, 運転開始(日産20トン)。2/「年表」
	6月 _日	本宮カーバイド工場, 第1期工事電炉1基運転開始。2/「年表」
	6月 _日	本宮石灰窒素工場完成(年産4万トン)。2/「年表」
	7月 1日	日本窒素肥料, 職員(社員, 準社員)の定年制度(満55歳)制定。2/「年表」
	7月25日	朝鮮窒素火薬, 硝安工場運転開始(日産15トン)。2/「年表」
	7月 _日	水俣工場, アセテートフィラメントの連続紡糸に成功。2/「年表」
	7月 _日	水俣工場, 無水酢酸, 酢酸ビニル第2期工事完成。2/「年表」
	8月14日	本宮カーバイド工場, 第1期工事完成(1万kW電炉2基, 年産5万トン)。2/「年表」
	夏	久保田豊, 朝鮮総督宇垣一成と朝鮮軍司令官小磯国昭に鴨緑江本流開発を説得して同意を取り付ける。116/32頁
	9月 1日	長津江第1期工事貯水池下流に第2期工事としての第2貯水池建設工事開始。130/82頁
	9月14日	朝鮮窒素火薬, 濃硝酸工場運転開始。2/「年表」
	9月19日	朝鮮窒素火薬, 硝安爆薬生産開始(日産2トン)。2/「年表」
	10月 3日	朝鮮窒素火薬, ダイナマイト工場完成, 生産開始(日産8トン)。2/「年表」
	10月26日	長津江水電, 資本金2000万円を7000万円に増資。2/「年表」
	11月 4日	朝鮮窒素火薬, 黒色火薬生産開始(日産1.5トン)。2/「年表」
	11月 _日	朝鮮送電は平壤・京城線に着工。2/93頁。
	秋も深い頃	関東軍から松花江開発の相談を受けた久保田豊は, 鴨緑江開発を板垣参謀総長に説き理解を得る。112/193-8頁。
	12月27日	朝鮮石炭工業, 灰岩乾留工場の運転開始。2/「年表」
	暮	久保田豊, 京城で咯血, 別府で療養。112/179-80頁
37年	1月14日	虚川江開発工事のため瑞豊鉄道株式会社設立。2/「年表」

日本窒素肥料株式会社年表（1896-1944）

年の始めから	水俣工場のアセトアルデヒド製造過程における二酸化マンガン回収工場建設着手。126/67 頁
4月 23日	日本窒素肥料、資本金を9000万円から2億円に増資。2/「年表」
春	アセテート糸（醋酸人絹）の試験糸を織布工場に持ち込み羽二重を試織、実用価値を確かめる。118/47 頁
春	水俣工場の中村清、塩化ビニールとメタアクリル樹脂の研究開始。126/67 頁
5月 1日	日本窒素肥料、朝鮮窒素肥料本宮工場を買収（社債発行用工場財団増加のため）。2/「年表」
6月 _日	長津江第2発電所完成（4基、出力11万2000kW）。2/「年表」
7月 20日	朝鮮水産工業設立。2/「年表」
7月 24日	朝鮮石炭工業、灰岩液化工場の試運転開始。2/「年表」
7月 _日	水俣工場、アセテートフィラメント試験設備（10 鍾）完成。2/「年表」
7月 _日	酢酸人絹（acetate rayon）「ミナリーズ」を桐生・足利に出荷。2/「年表」
7月 25日	興南乾式燐酸工場完成。2/「年表」
7月 _日	日本マグネシウム金属、マグネシアクリンカー生産開始。2/「年表」
7月 _日	虚川江発電所建設第1期工事開始。128/629 頁。
8月 20日	「満州国」産業部大臣と朝鮮総督府政務総監の間で「鴨緑江及豆満江発電事業に関する覚書」が調印される。2/95 頁
8月 _日	野口遵をはじめ施工担当各組首脳陣十数名現場合同視察、新義州からプロペラ船で水豊まで。131/143 頁
8月 _日	虚川江第1発電所の建設に着手。2/「年表」
9月 7日	朝鮮鴨緑江水力発電・満州鴨緑江水力発電が設立される。2/「年表」
9月 7日	水豊発電所の建設準備工事開始。2/「年表」
9月 _日	水俣工場合成酢酸工場、第5期工事完成。114/80 頁
11月 10日	興南工場、カーボランダム生産開始。2/「年表」
11月 21日	日窒宝石、興南工場で合成宝石生産開始。2/「年表」
11月 29日	平北鉄道（鴨緑江開発のため朝鮮側に敷設）を設立。2/「年表」
11月 _日	水俣工場中村清の塩化ビニール担当が正式に決まる。126/70
秋	中村清は実験室でアクリル硝子を製出、橋本彦七が役員会に持参して工業化を決定。126/70 頁
12月 1日	朝鮮送電、京城へ送電開始。2/「年表」
12月 1日	朝鮮石炭工業、設立時に朝鮮窒素肥料から譲り受けた永安工場と吉州及び永安鉍山を朝鮮窒素肥料に戻す。2/「年表」
12月 11日	朝窒水産水産工業、雄基工場完成。2/「年表」
12月 _日	アセトアルデヒド製造過程における二酸化マンガン回収工場完成して運転開始。126/67 頁
12月 _日	アセテートフィラメント10 鍾完成、フィラメントをミナリーズ、スフをミナレーヌと命名。117/45 頁
12月 _日	長津江第3発電所（3基、4万2000kW）が完成。2/93 頁
38年	2月 21日 朝鮮窒素火薬、ダイナマイト第2期工事完成。2/「年表」

2月 _日	本宮大豆油工場，運転開始。2/「年表」
3月10日	興南アークカーボン工場完成。2/「年表」
3月 _日	本宮調味料工場，運転開始。2/「年表」
3月 _日	朝鮮石炭工業灰岩工場，石炭直接液化反応設備の試運転開始。2/「年表」
4月 1日	満州鴨緑江航運設立。2/「年表」
4月21日	鴨北鉄道を，鴨緑江開発のために満州側に設立。2/「年表」
4月 _日	水豊ダム第1次仮締切工事完成，発電所の建設に着手。2/「年表」
5月 _日	本宮エチレングリコール工場，運転開始。2/「年表」
6月13日	本宮アセチレンブラック工場完成。2/「年表」
7月 5日	長津江第4発電所（3基，3万6000kW）完成，これを以て長津江系全発電所（33万4000kW）建設終了。2/93，「年表」
8月 1日	咸興合同木材設立。2/「年表」
9月20日	本宮アンモニア合成工場完成して運転開始。2/「年表」
10月19日	本宮カーバイド工場，第2期工事完成。2/「年表」
10月26日	日本マグネシウム金属（興南），金属マグネシウム生産開始。2/「年表」
11月 1日	朝鮮窒素火薬，朝鮮マイトを吸収合併。2/「年表」
11月16日	本宮ソーダ灰・塩化アンモニウム工場完成して運転開始。2/「年表」
11月20日	興南アークカーボン工場，本格運転開始。2/「年表」
この年	久保田豊は安倍孝良に誘われ黄河開発計画を纏めるため北支に出張。112/222-4頁
39年	
1月 2日	興南乾式燐酸工場，本格運転開始，燐酸アンモニア工場完成。2/「年表」
2月 3日	朝鮮窒素肥料，イソオクタン（航空機用燃料）工場の建設に着手。2/「年表」
3月 _日	水豊ダム，基礎コンクリート打ち込み本工事開始。2/「年表」
4月 1日	水俣工場，酢酸繊維素製造設備完成。2/「年表」
4月 _日	朝鮮石炭工業，灰岩全工場の試運転に入る。2/「年表」
4月 _日	宗像英二，阿吾地工場に赴任する。136/6頁
5月 _日	久保田豊，海軍の依頼により海南島の海口と三亜においてディーゼル発電で点灯。112/233頁
5月 _日	朝鮮窒素火薬，窒化鉛雷管工場完成。2/「年表」
7月26日	舒蘭炭鉱設立（吉林人造石油用原料炭採掘）。2/「年表」
7月26日	長津江水電，資本金7000万円から1億5000万円に増資。2/「年表」
8月 9日	吉林鉄道設立。2/「年表」
8月28日	興南アルミナ工場完成して運転開始。2/「年表」
9月 4日	「満州国」政府，石炭液化事業推進を目的にして帝国燃料興業と合併で吉林人造石油設立。2/「年表」
9月 5日	鴨緑江水力発電，新義州製材合同の株式を購入。2/「年表」
9月12日	興南アルミニウム電解工場完成して運転開始。2/「年表」
9月 _日	興南アランダム工場完成して生産開始。2/「年表」

日本窒素肥料株式会社年表（1896-1944）

	11月 _ 日	興南亜鉛精錬工場完成して生産を開始。2/「年表」
	12月 _ 日	水俣工場、塩化ビニールポリマー製造試験成功。2/「年表」
40年	1月 _ 日	野口遵は久保田豊を随行して海南島を視察。2/「年表」、112/229頁
	2月 9日	野口遵は京城において脳溢血で倒れる。2/「年表」
	4月 7日	海南島石碌鉄山鉱床発見。2/「年表」
	5月 4日	水豊ダム、中央仮締切工事完了。2/「年表」
	5月 _ 日	虚川江第1・第2発電所完成、発電開始（出力合計21万4800kW）。2/「年表」
	7月 _ 日	本宮カーバイド工場、第3期工事完成（2万kW電炉3基増設、イソオクタン原料確保のため）。2/「年表」
	8月 _ 日	水俣工場、アセテートフィラメントをスフ「ミナレーヌ」に切替。2/「年表」
	9月 2日	朝鮮窒素肥料、資本金を7000万円から1億円に増資。2/「年表」
	12月26日	日本窒素肥料、資本金を2億円から4億円に増資。2/「年表」
	12月 _ 日	水俣工場、酢酸エチル生産開始。2/「年表」
41年	1月 1日	朝鮮石炭工業、朝鮮人造石油に社名変更。2/「年表」
	1月 1日	南方部を設置、海南島など南方地域の開発を所管。2/「年表」
	1月 _ 日	海南島石碌鉄山の開発に着手。112/234頁
	7月 1日	長津江水電、朝鮮水力電気に社名変更。2/「年表」
	7月22日	日窒燃料工業設立。2/「年表」
	8月26日	鴨緑江水力発電、水豊発電所第1期工事完成、1号機の10万kWを満州に送電開始。2/「年表」
	9月 1日	鴨緑江水力発電、水豊発電所第1期工事完成、2号機の10万kWを朝鮮に送電開始。2/「年表」
	9月 _ 日	野口遵、朝鮮を去り伊豆韮山の別荘で病を養う。2/「年表」
	11月 _ 日	水俣工場、塩化ビニル製造設備（ニポリット月産3トン）。2/「年表」
	11月 _ 日	朝鮮水力電気、豆満江水系西頭水の発電水利利用の許可を取得。2/「年表」
	12月26日	朝鮮窒素肥料を合併（資本金4億5000万円）。2/「年表」
	この年	水俣工場、酢酸繊維素プラスチック「ミナコン」の生産開始。2/「年表」
42年	6月 _ 日	鴨緑江本流義州ダム（水豊ダムの下流）建設に着手（計画出力20万kW）。2/「年表」
	7月 _ 日	鴨緑江本流雲峰ダム（水豊ダムの上流）建設に着手（計画出力50万kW）。2/「年表」
	8月21日	北鮮水力電気設立（豆満江水系西頭水開発）、朝鮮水力電気が全株式所有。2/「年表」
	8月21日	朝鮮水力電気、資本金を1億5000万円から3億円に増資。2/「年表」
	8月 _ 日	水俣アセテートスフ新工場完成。2/「年表」
	10月28日	日窒海南興業設立。2/「年表」
	10月 _ 日	北鮮水力電気、西頭水水力発電所建設に着手（計画最大出力30万8400kW）。2/「年表」
43年	6月 _ 日	水豊ダム堤体のコンクリート打込完了（8月全堤体工事完了）。2/「年表」
	8月 2日	朝鮮水力電気、朝鮮電力管理令により朝鮮送電・富寧水力電気を合併して朝鮮電業となる。2/「年表」

	8月31日	北鮮水力電気, 朝鮮電力管理令により朝鮮電業との合併契約書を承認。2/「年表」
	9月 _日	虚川江第3・第4発電所完成(全発電所完成により出力33万8800kW)。2/「年表」
	12月末	1940年発注ドイツ製ISOMA射出成形機水俣に入荷。2/「年表」
	12月 _日	水俣工場, アセテートスフ製造中止。2/「年表」
44年	1月15日	野口遵逝去, 享年72歳。2/「年表」
	1月17日	日本窒素肥料および日窒化学工業, 軍需会社の指定を受ける。2/「年表」
	2月 7日	鴨緑江水力発電水豊発電所, 発電機6台完成, 60万kW。2/「年表」
	4月 _日	水俣工場, 酢酸繊維素月産9トン増産工事完成。2/「年表」
	5月 _日	水俣工場, アセテート紡糸設備を改造して塩化ビニル繊維「ニボレーヌ」の生産開始。2/「年表」
	11月 _日	水豊ダム, 水叩工事完了, ダム全工事完了。2/「年表」
	12月 _日	水俣工場, ポリビニルアルコール・ポリビニルブチラール樹脂生産開始。2/「年表」
	12月 _日	水俣アクリルガラス工場完成。2/「年表」

出典

- 01: 『日本窒素肥料事業大観』1937年, 日本窒素肥料株式会社。
- 02: 『風雪の百年 チッソ株式会社史』2011年, チッソ株式会社。
- 03: 庄司務『人造肥料工業』1941年版, 共立出版。
- 04: 日比勝治「藤山博士と三居沢」『電気化学協会雑誌』第4巻第11号, 1936年11月。
- 05: 野口遵『工業上より見たる空中窒素固定法』1914年, 工業之日本社。
- 06: 日比勝治「石灰窒素工業の発達とフランク博士」『日本土壤肥料科学雑誌』22巻3号, 1952年3月。
- 07: 「カーバイド及シアナミッド製造につき」『電気之友』214号, 1908年9月1日。
- 08: 工学会『明治工業史(化学工業篇)』1925年, 工学会。
- 09: 『45年の歩み』電気化学工業株式会社, 1960年11月。
- 10: 『デンカの歩み50年』電気化学工業株式会社, 1965年10月。
- 11: 'Discover of the Commercial Progresses for Making Calcium Carbide and Acetylene' アメリカ化学会(American Chemical Society)のウェブページ。
- 12: 「日本窒素肥料株式会社年譜」『日本窒素肥料事業大観』1937年, 日本窒素肥料株式会社。
- 13: 『東京帝国大学一覽(明治32-33年)』1899年, 丸善株式会社書籍店, 517頁。
- 14: 日比勝治『カーバイド工業講話』1941年, 丸善株式会社。
- 15: 曾木電気株式会社「第一期(自明治三十九年一月至全年六月)事業報告書」。
- 16: 曾木電気株式会社「株主総会決議録」(1908年7月15日)。
- 17: 曾木電気株式会社「臨時株主総会決議録」(1908年8月20日)。
- 18: 曾木電気株式会社「明治四十年自一月至六月 第三期事業報告書」。
- 19: 曾木電気株式会社「臨時株主総会議案」(1908年1月31日)。
- 20: 「日本窒素三十年記念座談会」『日本窒素史への証言(第十四集)』1981年, 「日本窒素史への証言」編集委員会。
- 21: 安藤徳器編『野口遵述/事業談・懐旧談』1938年, 生活社。
- 22: 廣田鋼藏「化学肥料の登場」『化学教育』23巻5号, 1975年10月。
- 23: J.B.C.ケルショウ「カルシウムサイアナミッドの製造」『電気之友』208号, 1908年6月1日。
- 24: 「人造肥料界の一大発明」『東洋経済新報』409号, 1907年4月5日。
- 25: 「肥料消費の増加と化学的要素肥料の必要」『東洋経済新報』442号, 1908年3月5日。
- 26: 「官有地貸渡願(明治三十六年十月十九日提出)」(「申請書及指令書目録 曾木発電所関係(1)」)。
- 27: 稟議「新潟県西頸城郡小澁村地内姫川大所川水利ノ件」(1909年2月19日)。
- 28: 稟議「勸業銀行借入ノ件」(1910年7月10日)。
- 29: 稟議「姫川測量ノ件」(1910年1月15日)。
- 30: 稟議「大所川発電水路工事請負契約を鹿島組と締結」(1911年1月13日)。
- 31: 稟議「野口藤山の姫川水利権日本窒素買取」(1911年6月1日)。
- 32: 稟議「姫川工事の新規注文は当分見合せのこと」(1911年10月16日)。
- 33: 臨時株主総会第1号議案「資本金増加ノ件」「増資理由書及企業予算」(1912年3月7日)。

日本窒素肥料株式会社年表（1896-1944）

- 34:「重役会決議事項」（1912年4月1日）。
- 35:「重役会決議事項」（1912年6月1日）。
- 36:「重役会決議事項」（1912年7月13日）。
- 37:脇村義太郎「電気化学工業の先駆者・野口遵」『脇村義太郎著作集 / 第2巻』1975年, 日本経営史研究所。
- 38:日本窒素肥料「営業報告書」（1912年上期）。
- 39:「重役会決議事項」（1912年8月31日）。
- 40:「熊本電気と日本窒素間における白川水利に関する契約証写」（1912年8月21日）。
- 41:「重役会議事録」（1912年10月10日）。
- 42:「稟議書」（1912年11月11日）。
- 43:「重役会決議録」（1912年8月14日）。
- 44:「重役会決議」（1913年4月10日）。
- 45:「重役会決議事項」（1913年5月20日）。
- 46:「重役会決議事項」（1913年7月6日）。
- 47:「重役会決議事項」（1913年9月5日）。
- 48:「重役会決議事項」（1913年11月12日）。
- 49:「重役会決議事項」（1913年12月2日）。
- 50:「重役会決議事項」（1914年7月20日）。
- 51:「重役会決議事項」（1914年12月12日）。
- 52:「重役会決議事項」（1915年1月12日）。
- 53:「重役会決議事項」（1915年4月19日）。
- 54:「重役会決議事項」（1915年4月21日）。
- 55:「重役会決議事項」（1915年9月16日）。
- 56:「重役会決議事項」（1915年12月4日）。
- 57:「肥料試験経過報告」「重役会議事録」（1911年12月25日）添付資料。
- 58:「空中窒素固定法特許無効審判事件」岸同門会編『故弁護士法学博士岸清一訴訟記録集』（1937年, 巖松堂）の「例言」。
- 59:「空中窒素固定法特許無効審判事件」岸同門会編『故弁護士法学博士岸清一訴訟記録集』（1937年, 巖松堂）の「事件の梗概」。
- 60:麻生慶次郎「本邦に於ける新人工窒素肥料の肥効試験」『日本農業雑誌』第1巻4号, 1905年12月。
- 61:「新契約書」「重役会協議事項（1912年8月31日）」添付資料。
- 62:「肥料製生高ヲ決定シ将来ニ於ケル営業方針協定ノ件」「重役会議事録（1912年2月13日）」。
- 63:稟議書「増資ノ件」（1910年8月4日）。
- 64:「重役会決議事項」（1911年12月25日）。
- 65:「重役会議事録」（1911年12月25日）添付資料。
- 66:「重役会議事録」（1912年4月1日）。
- 67:「重役会議事録」（1914年1月12日）。
- 68:「重役会決議事項」（1915年7月10日）。
- 69:「重役会議事録」（1912年1月13日）。
- 70:「重役会議事録」（1912年2月13日）。
- 71:「空中窒素固定法特許無効審判事件」岸同門会編『故弁護士法学博士岸清一訴訟記録集』（1937年, 巖松堂）の「第一審判記録」。
- 72:曾木電気株式会社「協議録」（1908年10月6日）。
- 73:曾木電気株式会社「第二期（明治三十九年七月至全年十二月）事業報告書」。
- 74:『郡山市史 第四巻 近代（上）』1969年, 郡山市。
- 75:野口遵「郡山水力電気談」『電気学会雑誌』141号（1900年4月5日）。
- 76:「三居沢カーバイド製造所第二回営業報告書」。
- 77:「三居沢カーバイド製造所第七回営業報告書」。
- 78:「明治三十七年一月十五日指令甲二第二五七四号」（「申請書及指令書目録 曾木発電所関係（1）」）。
- 79:「明治三十七年十一月十七日指令甲二第二七八七号」（「申請書及指令書目録 曾木発電所関係（1）」）。
- 80:曾木電気「決議書（明治四十年二月十七日）」。
- 81:『電気化学工業百年史』2015年, デンカ株式会社。
- 82:「空中窒素固定法特許無効審判事件」岸同門会編『故弁護士法学博士岸清一訴訟記録集』（1937年, 巖松堂）の「抗告審判記録」 346頁。
- 83:「重役会議事録」（1913年1月11日）。
- 84:「重役会議事録」（1916年2月4日）。
- 85:「重役会議事録」（1916年7月7日）。
- 86:国土交通省ウェブサイト「一級河川における水力発電施設諸元一覧（平成22年3月31日現在）」の「九州地方整備局管内」。

- 87:九州電気五十年史編纂委員『九州電気五十年史』1943年,九州電気五十年史編纂委員。
- 88:稟議書「鉄道院へ願書提出の件——次左案鉄道院へ願書提出相成可然哉」(提出:1913年2月22日)。
- 89:稟議書(14年12月10日)「曾本発電所水保工場買戻ニ付鉄道院へ出願ノ件——次左案鉄道院へ御出願相成可然哉」。
- 90:「重役会決議事項(大正九年十二月六日)」。
- 91:「重役会決議事項(大正十年六月十八日)」。
- 92:「重役会決議事項(大正十一年二月二十八日)」。
- 93:「重役会決議事項(大正十一年三月二十六日)」。
- 94:「重役会決議事項(大正九年一月十日)」。
- 95:「日本窒素の重要書類抄録 第一分冊」。
- 96:日本窒素肥料「社報 第壹号」(1912年2月15日)。
- 97:日本窒素肥料「社報 第貳号」(1912年11月1日)。
- 98:「日本窒素三十年記念座談会」『日本窒素史への証言 第十四集』1981年,「日本窒素史への証言」編集委員会。
- 99:高梨光司編纂『野口遵翁追懐録』1952年,野口遵翁追懐録編纂委員会。
- 100:田辺良平『広島を元気にした男たち』2007年,溪水社,213頁に掲載されている『芸備新聞(1920年3月2日)』の写真中の記事。
- 101:『感想録(広島電気沿革史姉妹篇)』1934年,広島電気株式会社。
- 102:『広島電気沿革史』1934年,広島電気株式会社。
- 103:『中国地方電気事業史』1974年,中国電力株式会社。
- 104:「重役会決議事項(大正八年九月二十六日)」。
- 105:「重役会決議事項(大正十一年十二月五日)」。
- 106:日本窒素肥料「営業報告書(第28期:大正八年七月一日ヨリ同年十二月三十一日)」。
- 107:日本窒素肥料「営業報告書(第35期:大正十一年十二月一日ヨリ大正十二年五月三十一日)」。
- 108:『旭化成八十年史』2002年,旭化成株式会社。
- 109:「重役会決議事項(大正九年二月十六日)」。
- 110:『薬品部30年史』1954年,旭化成工業株式会社延岡工場薬品部。
- 111:『白石宗城』1978年,「白石宗城」刊行会。
- 112:長塚利一『久保田豊』1966年,電気情報社。
- 113:山田豊「窒素生活二十三年の思い出」『日本窒素史への証言(第十二集)』1981年。
- 114:長阪精三郎「日窒営業課と酢酸業界」『日本窒素史への証言(第二集)』1977年。
- 115:杉本敏夫「大津,延岡工場の回顧—野口さんの人絹工業開発への貢献—」『日本窒素史への証言(第五集)』1978年。
- 116:久保田豊「日本窒素時代の回顧—野口さんの思い出を中心に—」『日本窒素史への証言(第七集)』1979年。
- 117:長阪精三郎「アセチレン系製品の販売開拓」『日本窒素史への証言(第十八集)』1983年。
- 118:神谷卓郎「戦前戦後のわがアセテート工業(遺稿)」『日本窒素史への証言(第十九集)』1983年。
- 119:咸鏡南道知事宛「発起人追加御届」稟議書24年12月18日提出「朝鮮水電株式会社創立参加ノ件」添付資料。
川村和男「大正末年に輝いた光明」『日本窒素史への証言(続巻第一集)』所収。
- 120:咸鏡南道知事宛朝鮮水電発起人総代副島道正7名の「発電水利使用許可願」。
川村和男「大正末年に輝いた光明」『日本窒素史への証言(続巻第一集)』所収。
- 121:朝鮮水電発起人総代副島道正代理森田一雄名義で朝鮮総督府齊藤実宛同日付「電気事業経営許可申請書」提出
川村和男「大正末年に輝いた光明」『日本窒素史への証言(続巻第一集)』所収。
- 122:川村和男「大正末年に輝いた光明」『日本窒素史への証言(続巻第一集)』。
- 123:間組『社報 一六〇号』(大正十五年五月十五日発行)。
- 124:宮塚利雄「日窒の朝鮮における事業展開と間組(一)朝鮮進出から赴戦江開発工事」『日本窒素史への証言(続巻第四集)』。
- 125:川村和男「日本窒素古書雑感」『日本窒素史への証言(第十一集)』1980年。
- 126:中村清「日本で最初の塩化ビニール工場」『日本窒素史への証言(続巻第十四集)』1991年。
- 127:電気事業経営許可申請書中起業日論見書及工事設計書訂正申請書中の「発起引受人ノ引受株数」。
川村和男「大正末年に輝いた光明」『日本窒素史への証言(続巻第一集)』(1987年)所収。
- 128:『間組百年史(1889-1945)』1989年,株式会社間組。
- 129:『朝鮮電気事業史』1981年,中央日韓協会。
- 130:宮塚利雄「日窒の朝鮮における事業展開と間組(四)長津江水電開発第二,第三期工事」『日本窒素史への証言(続巻第十一集)』。
- 131:佐藤時彦『土木人生五十年』1969年,中央公論事業出版。
- 132:三菱社誌刊行会編『三菱社誌(36)』東京大学出版会。
- 133:三菱社誌刊行会編『三菱社誌(32)』東京大学出版会。
- 134:三菱社誌刊行会編『三菱社誌(34)』東京大学出版会。
- 135:「工藤宏規—業績とその人—」野研時報 第7号 別冊 1958年7月,財団法人野口研究所。

日本窒素肥料株式会社年表（1896-1944）

136：宗像英二「野口さん発想の石炭液化に栄光あれ」『日本窒素史への証言（第二十六集）』1985年。

137：「大正三年七月二十日重役会決議事項」。

138：「堰新設公有水面使用願（明治三十六年十月十九日提出）」（「申請書及指令書目録 曾木発電所関係（1）」）。

139：「水路新設願人名義書換願（明治三十七年十月十九日提出）」（「申請書及指令書目録 曾木発電所関係（1）」）。

【追記】 チッソ株式会社及び公益財団法人野口研究所のご好意で所蔵資料を閲覧できた。記して謝意を表す。